

**訂正表** 別冊解説書P.17右段の4行目が欠けております。下記が全ページになります。

—ごひいきの作曲家はございましたか。

L:別ありませんでした。自分が演奏する作曲家をすべて、父は愛していたのです。けれど、マーラーについては、父は特別な責任感を持っていました。マーラーの遺族たちにかわって、自分がマーラーの作品を世に紹介するのだと心に決めていたのです。

—お父上はレコード録音のために、どんな心がまえをなさっていましたか。経験という宝庫からくみだしていたのでしょうか、それとも常に新しいものを作りだしていたのでしょうか。

L:いつも新しいものでした。演奏会の場合もおなじでした。どんな録音のときでも、どんな演奏会のときでも、その曲を初めて指揮するように準備していました。オーケストラの人びともおなじだったと思います。

—あなたのお父上ブルーノ・ワルターの手紙は、レコードによって、実際に訪れなかった国々にまで大きな影響をあたえておりますが、そういった国々の反響をどのように受けとられていらっしゃいましたか。

L:もちろん父は喜びました。その反響は、いろいろな国の人びとから寄せられる手紙、という形であらわされたのです。なかでも、日本からはもっとも多くの手紙をいただきました。父が一度も訪れたことのない国で、あれほど文通のあった国は、ほかにはございません。

とりわけ日本からは、若い音楽家たち、若い音楽ファンたちから、数え切れぬほどの手紙が父のもとへ来ました。父はどの手紙にも、ひとつひとつ返事を

書いていました。こうした日本の若い人びととの文通は、父にとって非常な喜びだったのです。若い人たちの暖かい心の触れ合いほど父を感激させたものはないのです。



長女ロッチェとブルーノ・ワルター。ピヴァリー・ヒルズの自宅にて。